

懐かしい言葉

札幌医科大学医師会

浦澤 正三

昭和10年代、私の幼時から小学校低学年の頃、家は南1条西6丁目（旧東急ハンズの駐車場出入り口西端あたり）にあり、当時珍しかった台湾バナナの色付けと卸しを家業としていました。職住一体、両親、7人の子供の内の5人（2人は子供の居ない祖父母宅に居住）と常に2～4人の若い衆（雇い人）が同居する10人ほどの世帯で、力仕事が多く、互いの大声が家中を飛び交っていました。中でも、幼時に新潟県柏崎出身の浦澤家の養女となり、札幌区内で商店経営の養父母の下、周囲の大人たちに揉まれて育った母親（トシ）が、誰彼との会話の中で相手の言葉尻を捉えて発する寸言は真的確で面白く、多彩でユニークでした。

今となっては懐かしい言葉の数々です。中にはあまりお上品とはいえないものもあります。なにせ家は裕福とは言えず、「お上品でけつかる」と皆が“お上品”自体を茶化して笑いの種にするような一家でしたから。

「ゴンボ堀り」はお袋の口癖で、地中深くから長い長い牛蒡を掘り出す作業に似て、いつまでも「根掘り葉掘り」穿鑿を止めない人のことでした。「暖簾に腕押し」は相手の反応がはっきりしないこと。

何事もサッサと片付ける「立て板に水」、「からすの行水」もお袋の好きな言葉で、「のらりくらり」の「ひょうたんなまず」は好みでなかったようです。

余計なことをくどくど言う「減らず口をたたくな」とよく怒られましたし、毀れやすいものを扱う際に「手もずらかくな」と注意されると、ますます手が振えたりしました。びっくり顔や目のクリッとした弟の容貌を「鳩が豆鉄砲くらったような」と形容したこともあります。

父は新米の使用人に、そんな「屁っ放り腰」（屁を放る時のお尻を後ろに突き出した格好）では力が入らない、などと言うこともありましたが、「他人の禰で相撲をとる」などの比喩や小話的のものが多くあまり当為即妙のヒラメキはありませんでした。

口喧嘩となると、口ごもる人の好い父の容貌の特徴を捉えて、「かな壺眼^{まなこ}」「薬缶頭」などと言い放って、いつもお袋の方が優勢でした。背の高い使用人を冷かす言葉は「電信柱」、極め付きは「半鐘泥棒」（火の見櫓の上にとりつけられた火事発見時に打ち鳴らす釣り鐘—半鐘—を盗んでしまうほどのノッポ）というウイットの効いたギャグでした。

生き馬の目を抜く商売の世界では、いざこれからという時に「トンビに油揚げ」を攫われることもあり、「極楽とんぼ」でのほほんとしているわけにはいきません。楽観的で人の好い父は他人の借金の保証人になって2度身代を返したとのことですが、家に常時置かれていた達磨さんのように、二人で「稼ぐに追いつく貧乏なし」と再起を果たしたことでしょう。

日常生活に結びついた言葉も多くありました。

他人に座布団を勧めるときの「煎餅座布団」は、文字通り中の綿がべっちゃんこになった座布団。今は見かけない、衣類の洗濯に使った表面に山形の凸凹のある「洗濯板」は、あばら骨が浮き上がった痩せた胸のことで、私もよく言われました。

「青菜に塩」はクシュンと意気消沈した様。「トウが立った」は旬を過ぎ初々しさを失った状態。1日2交代で半日休んでいるストーブ「ルンペン」は、働かないでぶらぶらしている人。むだ話などをして怠けている若い衆や家人は、「油を売（る）」ってないでさっさと仕事をしなさい、と叱られました。

お袋の話の中に出てくる長男は皆おっとり、ぼんやりの「総領^{あんどん}の甚六」で、ぼんやりしていて気の利かない「昼行灯」、逆に手先になって人の宣伝をする「提灯持ち」、人のご機嫌をとる「太鼓持ち」もよく口にする言葉でした。

戦時中の物資欠乏の中、「ああビールが飲みたい」などと言う若い衆には、必ず「鉄管ビール」（水道水）ならいくらでも、と返すお袋でした。

「タックリ三升」は祖母から聞いた言葉です。水漏れなどで「タックリ、タックリ」と一滴ずつでも一晩すると3升（5.40）も溜まるということで、なるほどと納得。

最後に子供たちの言葉で「百貫デブ」。尺貫法の廃止で意味が通じなくなった上、今では差別用語かとも思われますが、食料不足の当時珍しかった太った子を皆で「ヤーイ、ヤーイ、百貫デブ、電車に轢かれてペッチャンコー」と囃したてたものでした。

真黄色に発色熟成したバナナの房のぎっしり詰まった重いバナナ籠を地下の室から引き上げる仕事、皆「嫌だなー」の気配。コンクリートの床に立った3、4人全員がチンチョ（太い綱の先に10cmもある鉄製のフックが結わいつけてある）の先をバナナの木（茎）の皮で編んだ籠の上部に引っかけるのを見極めて、父はタイミングを計り「1、2の3」の「1、2」の代わりに「えんやー、こらやー」と掛け声、続いて全員が「どっこいしょう」と声を合わせ持ち上げる。一旦持ち上がると後は比較的容易、続けて地上まで引き上げるために力を合わせ独特の節をつけて歌う。「えんやーこらやー、どっこいしょうよー」「ちんちよでこらやー、どっこいしょうよー」「やんちゃでこまるー、どっこいしょうよー」。

今も70年前の父と若い衆たちの掛け声が聞こえてくる。